

誰でも歩ける
中山道
六十九次

中巻

下諏訪宿
御嵩宿編



Hitono Iunari

日殿言成

『Boon-gate』のPDF作品を ご覧いただく前に…

操作について

- 作品の多くは「もくじ」のページで、進みたいページの項目を押せば、そのページまでジャンプし、また、ジャンプしたページのタイトルを押せば、目次のページに戻るよう設定しております。
- 直前に開いていたページに戻るには、画面上の「◀」ボタンで、直前に開いていたページに戻ります。

読み方いろいろ

- 通常は画面の「倍率」が100%前後になっていますが、「倍率」を150%まで高めると文字が読みやすい大きさになります。
- 通常は「見開きページ」で設定されていますが、「単一ページ」にすると読みやすく感じます。
- 読み進めるときは、「十字キー」を使用すると手軽です。
- 「サムネイル機能」を使用して読み進めると、2～3頁からとばし読みするのに便利です。
- 頁を「回転」させることが可能です。地図などを拡大して見るときに便利です。

[http://www.bungeisha.com/PDF is/05-top1.html](http://www.bungeisha.com/PDF_is/05-top1.html) でPDF作品についての説明を致しております。ご参照ください。

誰でも歩ける

中山道

中巻

六十九次

下諏訪宿
御嵩宿編

Hitono Iunari

日殿言成

誰でも歩ける



中山道六十九次

中巻

Hitono Inari

日殿 言成

はじめに

中山道は、東海道とともに江戸時代の五街道の一つとされていますが、東海道と比べると、交通の便が悪く、歩いている時間よりも乗り物に揺られている時間のほうが長いという場所もけっこうあります。それだけに名所・旧跡など見所も多く、二十一世紀の現代にも、日本の道を満喫できる場所が数多く残されているのが魅力と言えるのではないのでしょうか。願わくば、ずっとこのまま残っていてくれたらいいなと思います。

私は、著者である「日殿言成」とは前著である『誰でも歩ける東海道五十三次』も一緒に歩き、共に感動しながら、一つひとつの宿場町の記録をまとめる手伝いをしてまいりました。今回の中山道に関しても、腎臓透析を受けながら歩き続けた彼の意思を受け継ぎ、彼の実姉である横田広子さんと本にまとめることができ、望外の喜びです。

今回の書籍にまとめるにあたって、どうしても写真の撮り直しをしたい所が何カ所か出てきていたため、私の休みを利用して、ひとりで宿場町を訪ねました。その短い旅の間にもさまざまな出会いと目には見えないけれど、彼が寄り添って歩いてくれているような嬉しい錯覚もありました。そして、二作目も一緒に編集をしているようで、大いに勇気づけられたのでした。

当時、実際に二人で歩いた中山道がすべて正しい道だったかどうかはわかりません。手書きで書いた地図も、もしかしたら役に立たないものがあるかもしれません。というのも、本当にこの道が間違いない旧道という道しるべが、必ずしもすべての道に設置されていないからです。せめて、旧道が消えてなくなる前に、道しるべをつけてほしいと心から願っています。読者の皆さんに少しでもお役に立てれば、著者もきつと喜んでくれると思います。

長井 みゆき



挿絵：横田広子

本書の使い方について

この本は、五街道のひとつである中山道の宿場と関連する名所旧跡を西暦二〇〇〇年から歩き始め、書きためた文章と地図を一つの形にしたものです。中山道を訪れてみたいと思っっている方、または、これから歩こうと計画を立てている方々の参考になれば幸いです。

本書は、五街道の起点である「日本橋」を出発点として、草津宿手前の所まで書かれております。京都方面から日本橋に向かう方には、読みにくいところもあるかもしれませんが、ご了承ください。

以前に出版した『誰でも歩ける東海道五十三次』（文芸社）は、とてもボリュームがあり、持ち歩きができるような本ではありませんでしたが、今回は、三巻に分けて出版いたしましたので、旅をする際のお供が可能になりました。

上巻は「日本橋～和田宿」、中巻は「下諏訪宿～御嵩宿」、下巻は「伏見宿～守山宿」までとなっております。草津宿と京都に関しては、『誰でも歩ける東海道五十三次』を参考にさせていただきたいと、著者が守山宿で筆をおいてしまいました。

手書きの地図は自分たちの足で歩き、メモを取りながら書きためていったものを形にしました。本という形になるまで、六年もたつてしまいましたので、旧跡、名所の読み違いや、道の変わってしまった場所も多々あると思いますが、その辺はご了承ください。

この本を参考に歩かれる方々のお力になれたら、著者も喜ぶことと思えます。

〈地図の記号一覧表〉

	本陣跡		郵便局		国道標識		松並木
	古い民家		銭湯・温泉		国道標識		杉並木
	民家 1		バス停		県道標識		役所
	民家 2		ストア		工場		県庁
	ビル		公園		一里塚跡不明		その他
	その他の家		休憩所		一里塚跡現存		遺跡
	ガソリンスタンド		踏切		杉		滝
	コンビニ		地下鉄		松		果樹園
	病院		駐車場		その他の木		梅
	喫茶店		宿泊		桜		名所・史跡
	飲食店		常夜灯		道路案内		教会
	学校		標石・石碑		道路案内		カエデ
	交番		//・kmポスト		道路案内		道の駅
	消防署・団		高札		道路案内		道路標識
	トイレ		説明板		道路案内		//
	銀行		信号		中山道碑		//
	農協		夢舞台道標		発電所		//
	寺		句碑・歌碑		見附跡		地下道
	神社		道祖神・地蔵		城址	送電線 木	
	幼稚園		石碑・道祖神		熊鈴		

〈地図の見方〉

地図はすべて日本橋を起点に京都方面へ向かうように書かれたものです。下が日本橋、上が京都方面として描かれております。

44	馬籠宿 まのりやまど	139
43	妻籠宿 つまのりやまど	128
42	三留野宿 みつどりののりやまど	122
41	野尻宿 ののりやまど	114
40	須原宿 すはらのりやまど	105
39	上松宿 あぎまつしのりやまど	93
38	福島宿 ふくしのりやまど	79
37	宮ノ越宿 みやのこしのりやまど	70
36	藪原宿 やぶはらのりやまど	63
35	奈良井宿 ならいしのりやまど	52
34	贄川宿 にえかわしのりやまど	44
33	本山宿 もとのりやまど	36
32	洗馬宿 せばしのりやまど	31
31	塩尻宿 しおじりのりやまど	24
30	下諏訪宿 しもすわしのりやまど	11
	本書の使い方について	6
	はじめに	5



50	宿場里程一覧表	215
49	参考文献・資料	213
	御嵩宿 みたけしのりやまど	208
48	細久手宿 ほそくでしのりやまど	196
47	大湫宿 おおくてしのりやまど	186
46	大井宿 おおいしのりやまど	168
45	中津川宿 なかつがわしのりやまど	155
	落合宿 おちあいのりやまど	148



宿場の規模

ここは中山道唯一の「温泉場」で知られ、難所の和田峠を越えてきた人々にとつては久々にくつろげる人気宿場だった。

天保一四年の記録によると宿場規模は本陣一、脇本陣二、旅籠屋四〇軒と大きく、和田峠を越えてきた人々はもちろんだが、この先には難所の「塩尻峠」が控えていたから、西からやって来る人にも人気だった。

また、宿場中央付近は「甲州街道」との分岐点でもあったから、ここには甲州街道から大勢の客が集まってきたという。

このような好条件が重なった宿場は「飯盛り女」が多くいることでも有名で、多くの旅籠屋が飯盛り女を抱え、泊まり客で繁盛していた。

温泉場はリラックスできたからはめを外す

人も多く、温泉に浸かってゆっくり英気を養っていたのだろう。

宿入口はちょうど「一里塚跡」から三〇〇メートルほど歩いた所で、現在入口には「番所跡」が残っている。

また、宿場に入ると急な上り坂を上って国道に出てしまうが、当時の宿場はちょうどこの国道沿いを中心に賑わっていた。

実はこの付近を写した貴重な写真が残っていて、この先にある「民俗資料館」のパンフレットの表紙になっている。

明治に入ってからの写真だが、セピア色の写真はとても魅力があり、これを見ると当時の様子がよくわかってくるだろう。

当時下諏訪宿には有名な温泉場（注1）が三カ所あったが、湯はそれぞれ「綿の湯」「兎湯」「日過湯」と呼ばれていた。

江戸時代、普通の旅籠屋には今の温泉旅館とは違って温泉は引かれておらず、旅籠屋に泊まった客も皆この温泉に浸かりにきていた。

しかし、旅人に一般開放されていたのは間屋場隣にあった「綿の湯」だけで、あとの湯は地元の人以外は入れなかったという。

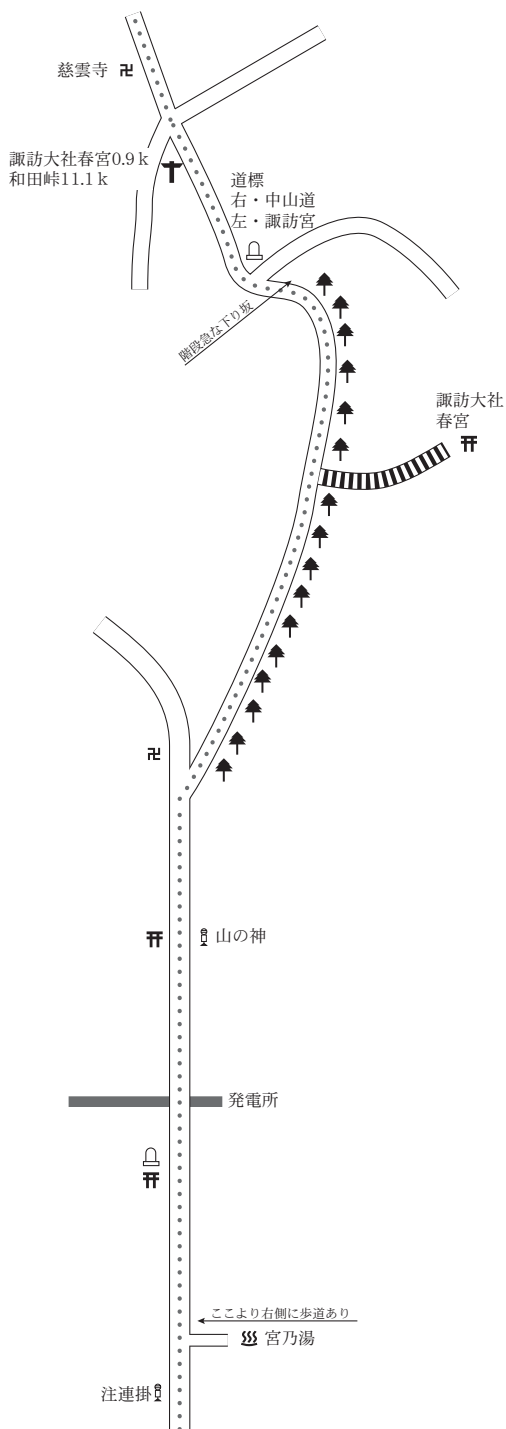
注1 江戸時代は三カ所だったが、現在は約二〇本の源泉があるという。



綿の湯の説明。



一里塚跡



綿の湯伝説

ちなみに、一般の人が入浴できた「綿の湯」

なお、当時の温泉場はいずれも共同浴場で、しかもその「綿の湯」も身分によって区別されていた。身分の低い人々は屋根なしの湯で「混浴」だったが、身分の高い人が入る湯には「屋根」があり男女別々になっていたという。今では混浴の温泉などほとんど見かけなくなったが、江戸時代の温泉は混浴が普通で、誰も恥ずかしいとは思わなかったという。

には次のような伝説が残っている。
昔、諏訪明神の「八坂刀売神」が「上社」から「下社」にお移りなさる際、いつも使っていたお化粧の湯を綿に湿らせ、湯玉にして持参したところ、その湯玉を置いた所から湯が湧き出したという。
このような「神の湯伝説」が生まれた場所がここで、諏訪最古の温泉場としても有名だった。
「綿の湯」跡はこの先の甲州街道分岐点に残っているが、当時の温泉場は失われ、今は湯



本陣跡

玉をモチーフにしたモニュメントと当時の様子を再現した絵や説明が置かれている。

本陣

なお、「綿の湯」跡の手前には「本陣」だった「岩波家」が残っている。

当時この庭園は「中山道一」の名園としても有名だった。

今も有料で開放されているから、時間があれば立ち寄って名園とはどのようなものか確かめてみるといいだろう。

鍔焼地蔵

ところで、番所跡から急坂を登って国道に出たが、国道左手にある「来迎寺」には「和泉式部」伝説が残っている。

昔、下諏訪の間屋にカネと呼ばれる下女がいたという。

カネは御主人に頼まれ、いつも弁当を届けていたが、弁当を届ける途中、近くにあったお地藏様に内緒で弁当を一箸ずつ供えていたのだ。

ところが、弁当が少なくなっているのに主人が気づき、カネがつまみ食いしていると思

い、怒って焼火箸でたたき、傷を負わせてしまったという。

ところが、カネがお地藏様に祈ると、なんと不思議な事に傷は地藏の額に移ってすぐに治ってしまったという。

その後、カネは美しい娘となって京都に登り、宮中に仕えて「和泉式部」と名乗ったという。そして、この地藏をもらい受け、後に嵯峨野に隠栖したあとも御本尊として祈っていたという。

時は過ぎ、後に「北条時頼」が嵯峨野を通りかかった時、古い庵の中から「下諏訪に帰りたい」という不思議な声が聞こえてきたという。

かわいそうだと思った時頼はお地藏様を「笈」に入れ、元の来迎寺に戻してやったと言いつつ、い伝えられている。

地藏様は今も「鍔焼地蔵」と呼ばれ地元の人々の信仰を集めているが、ここにはその時お地藏様を運んだ笈もいっしょに残っている。

ちなみに、笈とは僧が背中に背負っている大きな箱の事で、普通はこれに仏具などを入れていたが、地藏様を運んだ笈が残っているというのも伝説を裏付ける証拠と言えるのだ



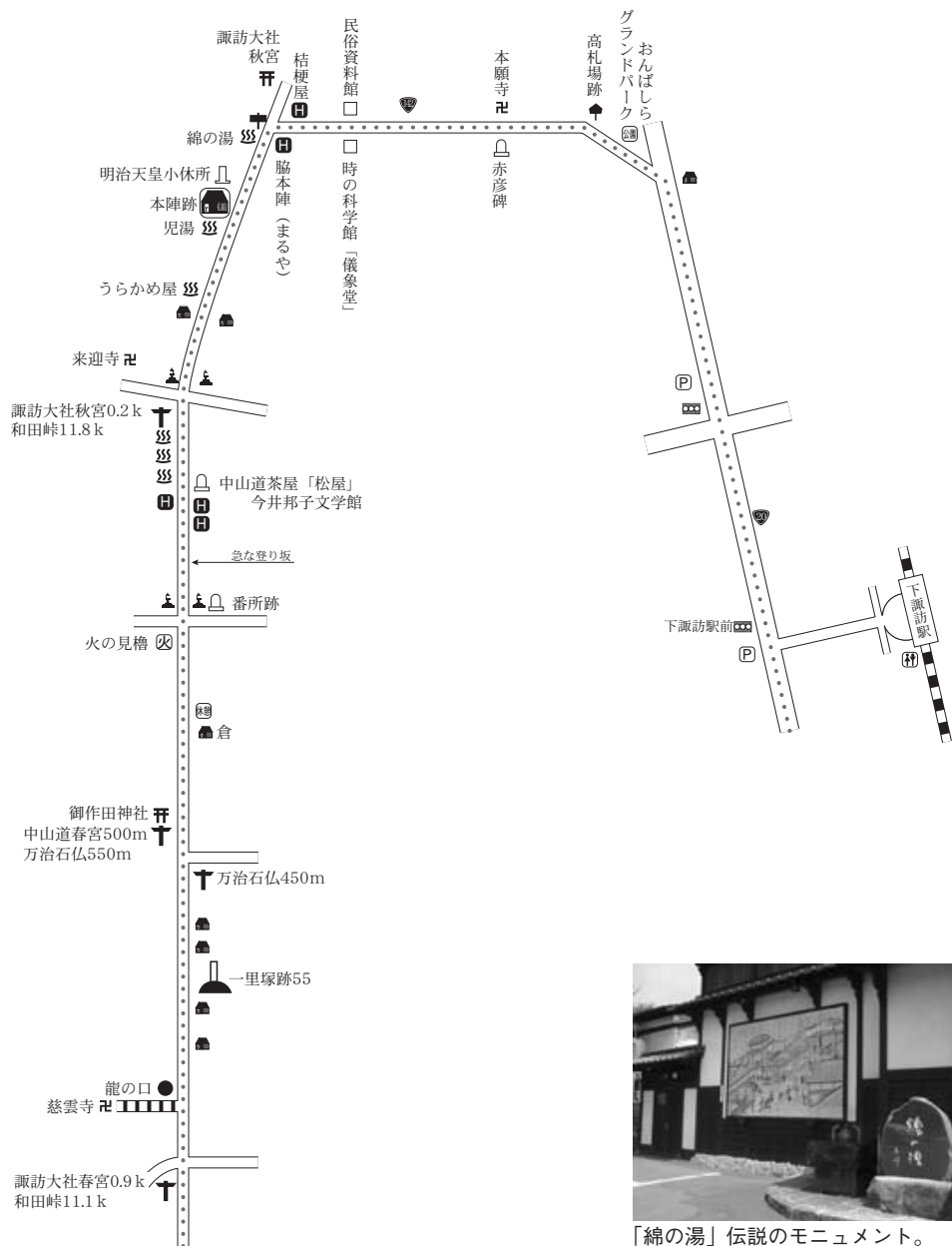
来迎寺の鍔焼地蔵と和泉式部の説明板。



来迎寺山門風景



今井邦子文学館



「綿の湯」伝説のモニュメント。

う。

なお、中山道筋では和泉式部の墓と呼ばれるものが「細久手宿」を出て「御嵩宿」に向かう国道沿いに残っていて、和泉式部についてはそこでも触れているから、そちらも参照していただきたい。

少し寄り道してしまったので元の宿場に戻るとしよう。

宿内の道路は「綿の湯」を左にして右手に曲がっていたが、ちょうど角の店が「脇本陣」だった「まるや」跡だという。

また、近くには「桔梗屋」という旅館も見られるが、これも当時は旅籠屋だった。これらを見ると宿場がこの付近に集中していたのもよくわかってもらえるだろう。

追分

なお、綿の湯前は「中山道」と「甲州街道」との追分でもあり、今も「甲州道中終点 右江戸へ五十三里十一丁」「江戸より五十五丁七丁 正面京都へ七十七里三丁」と彫られた道標が残っている。

ここから中山道を行く人は右折したが、甲

州街道を行く人はここから秋宮の方へ出ていたのだ。

民俗資料館

なお、右折して宿場を歩くと先ほど紹介した「民俗資料館」があるが、これも昔は「旅籠屋」で、建物は当時のままだという。

部屋に上がると江戸時代の家の造りも良くわかってくるが、入口には当時の色々な看板も保存されていた。旅籠屋や商家の珍しい看板も残っているから、時間があれば調べてみると面白いだろう。

ところで、「綿の湯」先を曲がらず、「秋宮」へ出る甲州街道を歩くと江戸時代から名物だった「塩ようかん」を商っている「新鶴」がある。

塩ようかんと言っても実は塩辛いようかんではなく、普通の甘いようかんなのだ。ほんのちよっぴり隠し味に塩を使っているからこのように呼ばれている。

お土産にされると喜ばれるだろうが、日曜日が定休日なのは残念と言えるだろう。

秋宮はここからすぐの所にあり、春宮に比べると立派な作りで参詣者の数も多いが、ち



桔梗屋は昔から旅籠屋だった。



民俗資料館の壁には、古い看板が飾られている。



脇本陣「まるや」
現在も旅館として営業している。

よっと近代化され過ぎてるのが惜しまれるところだ。

しかし、ここには日本一の大ききを持つという青銅製の狛犬やしめ縄などが見られるから、立ち寄っても損はないだろう。

再び民俗資料館のある中山道に戻り、宿場を歩くと右手に「時の科学館 儀象堂」が見られる。

諏訪湖周辺は近代に入って精密機械工業が発達したが、ここに精密機械の元祖とも言われるべき時の科学館を作りその偉業を伝えている。

中山道との直接のつながりは無いが、興味深い物がたくさん見られる科学館と言ってい

いだろう。

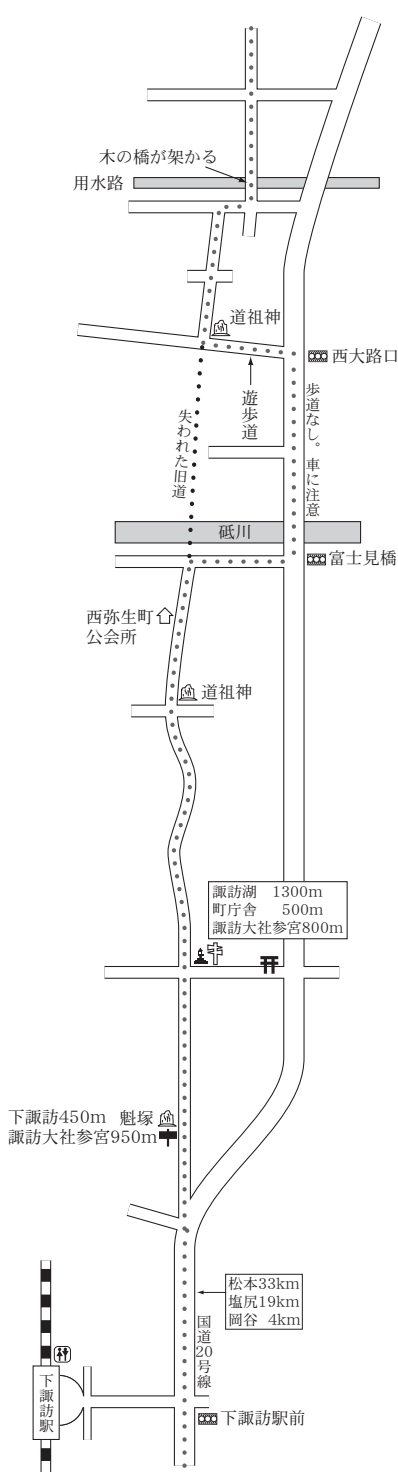
なお、先には「高札場跡」も残っているが、この隣には最近になって作られた大きな「おんばしらパーク」がある。

旧道はちょうどこの公園先で右に曲がっているが、下諏訪宿もだいたいこの付近が宿はずれだったという。

下諏訪宿は久々に見所の多い宿場だったが、今でも泊まれる宿がたくさんあるから時間が許せば一泊したい場所ではないだろうか。

さて、宿場を出るとしよう。

大きな交差点を渡ると左手に「JR下諏訪駅」入口が見えてくるが、旧道はその先を左



おんばしらパークのモニユメント。



高札場跡

手へ入って行く。

魁塚

旧道に入るとすぐ左手に見えるのは「魁塚」で、これは「赤報隊」の人々を葬った所だという。

旧道は「西弥生町公会所」を見ると「砥川」に突き当たってしまうが、昔はこの先にも道があったという。

しかし、ここもすでに通行不能で、ここは一度国道に出て「西大路口」信号で左に入り、旧道に戻るのがいいだろう。

旧道部分に戻るとやがて再び広い道路に合流していて、緩い上りぎみの右手には「平福寺」が見えてくる。

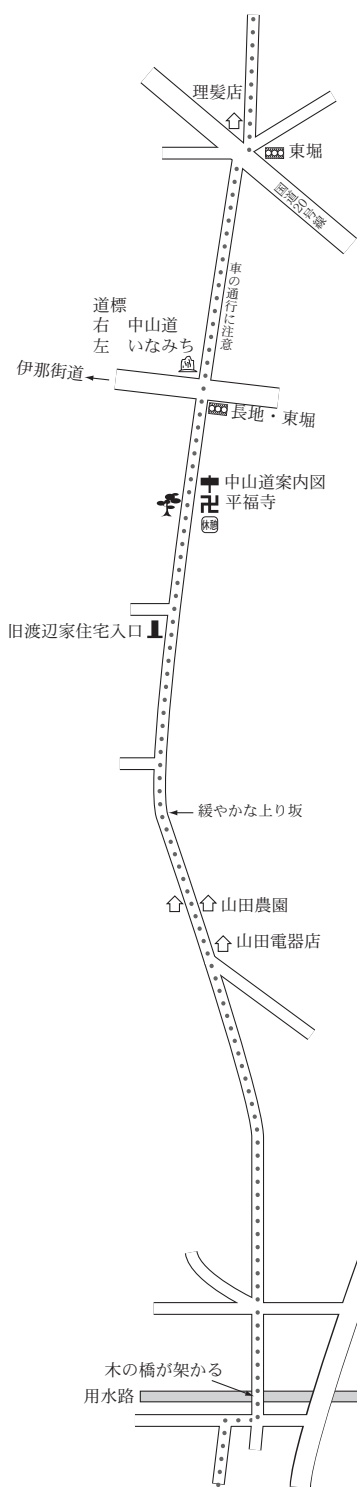
現在ここには「中山道案内」図が置かれていて、傍らにはベンチが備え付けられている。

伊那街道

平福寺を出ると「長池・東堀」信号に出て大きな道路を横切るが、ちょうど向かいに見えるのは「中山道・いなみち」と彫られた道標で、ここで左に折れると「伊那街道」と呼ばれている道だった。

慶長七年（一六〇二）、江戸幕府によって中山道が制定されたが、当初の中山道はこの道を辿り、岡谷市東堀辺りから「三州街道」の「小野」に出ていたという。

そして「牛首峠」を越え、木曾の「桜沢」付近に出ていたと言われている。



魁塚風景

しかし、元和二年（一六一六）頃、今のよ
うなルートに変わったと言われ、「塩尻」から
「洗馬」、「本山」を通る木曾路が開かれたのだ
った。

ルートが突然変わった原因だが、なんとこ
の道路を開拓した人物（時の勘定奉行だった
大久保石見守長安）の不正が死後に発覚した
ためだと言われている。

死んでから不正が発覚したわけだが、その
後の調べで一族郎党まで罰せられているとい
うから、今では考えられないような厳しいお
裁きが下ったことになる。

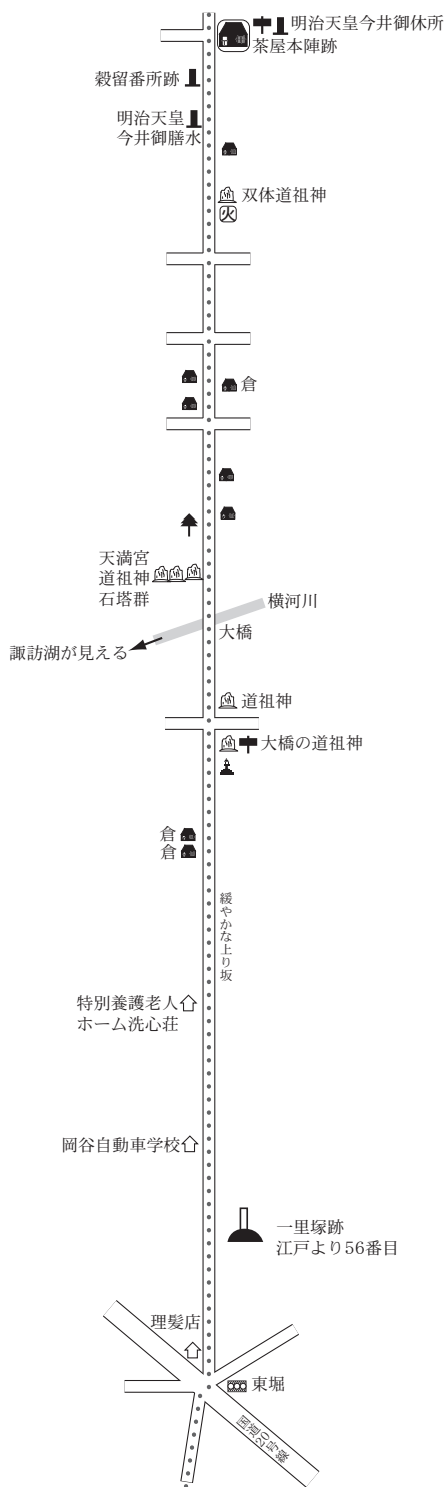
この時中山道のルートも変更されたわけで、

それまでの伊奈街道は廃止され、ここから塩
尻峠を越えるルートが開かれたという。どの
ような不正だったのか詳しい事はわからない
が、幹線道路が変わってしまうくらいだから、
かなりの重罪だったのだろう。

東堀の一里塚

道標から中山道に戻るとしばらくは狭い道
だが、この道もやがて国道二〇号線を横切り、
「東堀」交差点から国道右手へ入って行く。

「理髪店」裏を通っているのが旧道で、旧道
に入るとすぐ右手に「一里塚跡」碑が見えて
くる。



東堀の一里塚跡。



いなみち道標

途中省略

本編はダウンロード時間短縮のため省略版でお届けしています。
途中省略なしの完全版をご希望の方は製品版をご「購読」ください。

著者プロフィール

日殿 言成 (ひとの いいなり)

日殿言成はペンネーム。

昭和26年東京は麻布（現在は六本木）の生まれ。

大学卒業後、某ファミリーレストランの店長などを務める。

その後、腎臓病で入院。平成2年から人工透析を始める。

平成17年5月永眠。

著書に『誰でも歩ける東海道五十三次』（文芸社）がある。

誰でも歩ける中山道六十九次 中巻 下諏訪宿～御嵩宿編

2006年9月15日 電子出版発行

著 者 日殿 言成

発 行 者 瓜谷 網延

発 行 所 株式会社文芸社

〒160-0022 東京都新宿区新宿1-10-1

電話 03-5369-3060（編集）

03-5369-2299（販売）

<http://www.boon-gate.com>

© Hiroko Yokota 2006 Corded in Japan

ISBN4-286-01566-1

（文芸社発行の通常書籍（紙の本）については、全国書店でお尋ねいただくか、「文芸社ON-LINE」
サイト、<http://www.bungeisha.co.jp>を御参照ください。）

新 06.08.31 CAPS